◇ 国　語

国 2－1～国 2－20 まで 20 ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間にとって孤独(一)とは何か。我々が孤独を恐れ、孤独によって寿命を縮め、孤独が社会に混乱をきたすのはどうしてか。

これらの問いに向き合う前に、「孤独とは何か」ということについて整理しておこう。辞書を引いてみると、孤独という言葉にはだいたいこんな意味が与えられている。

①仲間や身寄りがなく、ひとりぼっちであること。思うことを語ったり、心を通い合わせたりする人が一人もなく寂しいこと。

また、そのさま

②みなし子と、年老いて子のない独り者

（デジタル大辞泉）

右の説明からもわかるように、孤独というのは、①の「寂しい」という心理状態を意味する場合と、②の「ひとりきりでいる」という状態を指し示す場合があって、①のほうがより一般的だ。つまり、主観的な孤独と客観的な孤独があって、前者のほうが広く認知されているイメージだ。実際に、孤独は英語では「loneliness」と訳される。「寂しい」という意味の「lonely」の名詞形だ。つまり、「孤独」というのは一般的には主観的な心の状態ということだ。

主観なので個人差があるのは当然だ。「1週間誰とも会話をしてないけれど、ぜんぜん平気」という人もいれば、「会社のドウリョウたちとワイワイ楽しく食事をしたけれど、家に帰るとひとりぼっちで、寂しくて死にそう」という人もいる。心の問題なので、人それぞれ、孤独への耐性はバラバラだ。ここは非常に大きなポイントだ。

ただ、「人それぞれ」とはいいながらも、人類全体をみれば、やはり「孤独に弱い」という主観をもっている人のほうが圧倒的に多数派を占めていそうだ。

日本のみならず、世界各所で孤独という問題が社会を覆っている。たとえば孤独によって心身にシショウ[B]をきたしたり、さらには自ら命を絶ってしまったり、自暴自棄になって他人に危害を加えてしまうようなことさえ起こる。

孤独はあくまで個人の主観の問題ではあるのだが、時に、多くの人間を精神的に追い詰めてしまうほど、恐ろしく、かなり苦しいものってことになる。

次に気になるのは、「なぜそれほどまでに人間は孤独に弱いのか」(二)というところだが、これは人類の進化の過程で刷り込まれた「孤独になると死ぬ」という恐怖が根底にあるからだと思われる。

ヒトは700万年ぐらい前にチンパンジーから系統的に分かれたとされていて、その後、サヘラントロプス、アルディピテクス、アウストラロピテクスなどを経て、ネアンデルタール人とホモサピエンスが出現するわけだが、これらの人類は集団で生活していたと考えられている。人類以外の霊長類も、ゴリラやチンパンジー、ニホンザルなど群れをつくって生活している種が多い。

初期の人類も、生存のために「群れ」にならざるを得なかった。正直いって、人間というのは野生界ではかなり貧弱な存在だ。大型肉食獣みたいに鋭い牙をもっていなければ、草食動物のように俊敏に走ることもできない。皮膚だってサイやカバみたいに硬くないから、ちょっと引っかかれたりかじられたりしただけでも、すぐに致命傷になってしまう。

そんなひ弱な人類が生き残るためには、「集団で協力する」という選択が最も［ア］だった。たとえば、ネアンデルタール人やホモサピエンスは狩りをしたと考えられるが、ひとりで大型の草食獣を狩るなんていうのは、身体能力が高い個体であってもかなり難しい。でも、集団で協力すれば成功率は高くなる。あるグループが獲物を追いかけて、行き止まりのようなところへ追い込む。待ち伏せしていたグループが上から石を落として傷つけて、さらに別のグループが棍棒(こんぼう)で殴ってトドメを刺すなんて役割分担ができるので、かなりコウリツ[C]的かつ安全に狩りを行うことができる。

そういう時代が何万年も続くと、ヒトは「集団で協力する」ということがやりやすいようなツールを進化させていく。ホモサピエ

ンスになってからは、それは言語であったり、顔の表情でのコミュニケーションであったり、集団で同じものを崇拝する古代宗教であったりするわけだが、いずれにせよ小集団のグループは、［イ］な同一性を共有するようになる。

狩猟採集生活をしていた頃のホモサピエンスの小集団は「バンド」と呼ばれ、50～100人程度だと考えられている。「集団で協力する」ということに長けたバンドは生存可能性がより高まるし、［a］子孫も多く残すことができる。世代を重ねるたびに、集団生活に適した遺伝的なタイプをもった個体が増えていくので、ホモサピエンスの種全体で「集団で協力する」ということが主流になる。

それは裏を返せば、「集団で協力する」ということができない個体は生き残れないという話だよね。つまり、何かしらの理由で群れに加えてもらえなかったり、群れに属していたんだけど追放されてしまったりした「孤独な個体」は、そもそも生き延びることができなかったのだ。

このように、初期のホモサピエンスたちが味わっていた「孤独になると死ぬ」という恐怖が、現代人の遺伝的な因子のなかにも刻み込まれていて、それがトラウマのように影を落としている可能性はあるだろう。

もちろん、種全体でみれば、ずば抜けて身体能力が高く、集団で協力せずともひとりで大きな獲物を狩ることができるような猛者も時には現れたはずだ。しかし、一人ひとりの能力はそれほどでもなくとも「集団で協力する」ほうがコウリツはいいに違いなく、孤独でも平気な人は自然選択で徐々にリジェクト（排除）されていったと思われる。

［b］、集団で群れることを嫌った人というのは、たとえ本人が孤独を謳歌（おうか）していようとも、このような時代にはかなり生きづらい環境に置かれていて、それゆえにどんどん淘汰（とうた）されていった可能性がある。先ほども指摘をしたように、人間というのは貧弱な種だ。どんなに身体能力が高い個体であっても、狩りで怪我をしたり、病気になったりして動けなくなったらもうそこでアウトだ。生き延びることはできない。

そういう孤独な個体が生き延びられるようになったというのは、実はごく最近のことなんだよね。人類社会が進歩をして、分業化が進んで貨幣経済が発達したことで、金を稼ぐ技量さえあれば、孤独でも生き延びられるようになったわけだ。

そこに至るまでの長い年月、人類にとって「孤独は死に直結する」というのが常識だったのだ。

人間が孤独を恐れるようになったルーツは、狩猟採集生活をしていた頃のバンドの結束にあるのはたしかだとして、「孤独で寂しいという社会的な感情は、人びとが農耕を覚えて定住を始め、それなりにコミュニティが大きくなったからこそ芽生えたのではないか」と考える人もいるかもしれない。

たしかに、バンドから排除された個体は「死ぬ」と恐怖しただろうが、それが現代の我々が感じる「loneliness」だったのかというと、まったく同質のものではなかったはずだ。寂しいとか、ひとりぼっちだという感情はまだ生まれていなかった可能性もある。

その一方でたしかなのは、棍棒をもって獲物を追いかけ回していた狩猟採集時代の感性というのは、人類を人類たらしめた［ウ］な部分であり、現代の我々にも多大な影響を与えているはずだということである。人類が農耕を始めたのはたかだか1万年前から後のことであって、それまでの何十万年もの間、人類は肉食を主とした雑食を続けてきたからだ。

よくホモサピエンスのことを「道具をもった猿」という表現をする人がいるが、生物学的にはちょっと間違っている。正しくは「道具をもった肉食獣」[注3]なのだ。

身体的な特徴をみれば、人間は明らかに肉食が基本だ。象徴的なのが腸の短さである。草食動物は食べたものを消化するのに時間がかかるので、体に比べて腸が非常に長くなる。たとえば、牛などは体長に比べて腸は20倍くらい長い。［c］、人間の腸は体長の5倍くらいで、これは4倍のライオンとそれほど変わらない。これが何を示すのかというと、我々は本来、肉食だったということである。

ホモ属になる前の人類はあまり肉を食べなかったと思われるが、ホモ属になると人類は肉をたくさん食べるようになり、それとともに脳が発達したのである。脳の成長には多価不ホウワ脂肪酸が必要で、それは肉にたくさん含まれているのだ。

（中略）

人類の歴史を振り返り、生物学の視点から考察を進めると、私たちが孤独を恐れる理由のひとつは、バンド時代から引きずっている感性であることはすでに述べた。

孤独、すなわち群れからの排除や追放が、ただ単に「生き延びられない」ということだけでなく、さまざまな不安や恐怖を招く要因になっていた可能性もある。［ d ］「自分が窮地に陥ったときに、誰からも助けてもらえない」、また「最期を誰にも看取ってもらえない」というような恐怖である。それ故に、自分がそうなったときのことを想像して、窮地に陥った仲間を助ける行動が発達したのだろう。人類の祖先は、互いにいたわり合い助け合っていた姿を想起させるようなコンセキ[E]を遺している。

その代表が、イラク・シャニダール洞窟のネアンデルタール人である。

この洞窟からは、コロンビア大学のラルフ・ソレッキらによって、１９５７～61年にかけて9体のネアンデルタール人の人骨が発掘された。調べてみると、3万５０００～6万５０００年前にかけてのものだったが、ここである画期的な事実がわかっている。それは当時、「コミュニティ内の弱い仲間を助ける」という意識がすでにあったということだ。

それが窺（うかが）えるのが、「シャニダール1号」[四]と呼ばれる男性の人骨だ。彼は当時からすればかなり高齢（40～50歳）まで生きていたのだが、それ以上に驚かされるのが、かなりの大怪我を負っていたということだ。左眼窩（がんか）に古い粉砕骨折のあとがあり、右腕は途中から切断されていた。さらに、下肢や足は変形していた。

骨の状態を調べたところ、怪我は亡くなる直前にできたものではないことがわかったという。つまり、シャニダール1号は狩りなどによって大怪我を負ったが何とか一命を取り留め、仲間たちに支えられながら、当時としてはかなりの高齢まで生き延びていたという推察ができるのだ。

（池田清彦『孤独という病』による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　ドウリョウ

①個人のサイリョウに任せる　②リョウゼンとした事実
③学生リョウに入る　④カンリョウ主義の組織
⑤大工のトウリョウ

1

B　シショウ

①正面からショウトツする　②経歴をサショウする
③ショウジの紙を貼り替える　④敵が雲散ムショウする
⑤仏教ハッショウの地

2

C　コウリツ

①グンコウのあった武者　②セイコウ雨読の日々
③親コウコウな少女　④タイコウ策を練る
⑤ジコウを迎えた事件

3

D　ホウワ

①ホウショク暖衣して暮らす　②病人をカイホウする
③天衣ムホウの傑作　④ホウカツして考える
⑤ホウケン社会の始まり

4

E　コンセキ

①田畑をカイコンする　②寺をコンリュウする
③積年のイコンを晴らす　④事故現場のケッコン
⑤サッコンの経済情況

5

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ に入る語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　①示唆的　②合理的　③逆説的　④抽象的　⑤卑俗的　6

イ　①芸術的　②一時的　③精神的　④打算的　⑤運命的　7

ウ　①根本的　②表面的　③組織的　④開放的　⑤過渡的　8

問三　空欄 a ― b 、 c ― d に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

a ― b　9

①要するに ― たとえ　②すなわち ― しかし
③さらに ― ただし　④従って ― とはいえ
⑤それゆえに ― つまり

c ― d　10

①そして ― いうなれば　②すなわち ― 要は
③一方 ― しかも　④しかし ― たとえば
⑤だから ― すなわち

問四　傍線部（一）「孤独」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

①孤独とは、元々「ひとりきりでいる」状態を表す語であったが、英語で孤独を「loneliness」と訳すことから「寂しい」という意味でも用いられるようになった。

②孤独には「ひとりきりでいる」という状態を意味する場合と、「寂しい」という心理を意味する場合とがあり、前者の意味の方が一般的に広く認知されている。

③孤独は人の寿命を縮め、社会に混乱をもたらす要因にもなるとされるが、日本では特に「寂しい」という孤独の心理と関係した社会問題が急激に増加しつつある。

④孤独は「寂しい」という主観的な心の状態を表すものとしてよく知られているが、何に対してどの程度孤独を感じるかは人によって異なり、その耐性には多様性が認められる。

問五　傍線部（二）「孤独に弱い」とあるが、人間にそうした傾向があるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

①人間は、生後しばらくの間は他者の助けがないと生存できない性質をもっており、「見捨てられると死んでしまう」という本能的な恐怖が刷り込まれているため。

②人間の祖先は、群れから外れると生き延びることができないケースが多く、「孤独が死につながる」という恐怖が遺伝因子にも刻み込まれているため。

③人類は、集団で協力し農耕生活を営む中で種としての進化を遂げてきており、「孤独になると死ぬ」という恐怖が心の根底に刷り込まれているため。

④人間は、古来より他者とかかわる中で自己の役割や存在意義を見出してきたことから、「孤独になると生きる意味を見失う」という本能的な恐怖を抱えているため。

問六　傍線部（三）「道具をもった肉食獣」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①人類は道具を使う知能を備えていることに加え、ホモサピエンスとなる以前から肉食を基本とする生活を長く続けてきたということ。

②人類は道具を使う知能を備えているがゆえ、ホモサピエンスの時代から肉食獣と同じように獲物を狩る能力に長けていたということ。

③ホモサピエンスは道具を使う知能を備えていることに加え、肉食を主とした雑食を続け、腸の構造も肉食獣と類似しているということ。

④ホモサピエンスは肉食獣と同様の長い腸を持ち、肉の多食によって脳が発達した結果、道具を使える知能を獲得するに至ったということ。

問七　傍線部（四）「シャニダール1号」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①シャニダール1号の人骨からは、彼が大怪我を負ってなお高齢まで生き延びていたことがわかる。そこから、当時のネアンデルタール人が非常に強い生命力を備えていたことが察せられる。

②シャニダール1号の人骨からは、彼が負った大怪我がきちんと治癒していたことがわかる。そこから、当時のネアンデルタール人が弱った仲間を献身的に世話していたことが察せられる。

③シャニダール1号の人骨からは、彼が大怪我を負いながらも一命をとりとめ高齢まで生きたことがわかる。そこから、当時のネアンデルタール人に仲間を支え続ける意識があったことが察せられる。

④シャニダール1号の人骨からは、彼が狩りで怪我を負い、それが致命傷となって死亡したことがわかる。そこから、当時のネアンデルタール人がいかに過酷な環境に置かれていたかが察せられる。

問八　本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

①ホモサピエンスの小集団は「バンド」と呼ばれるが、そこから排除された個体は、現代の我々が感じる「寂しい」と同質の感情を抱いていたと考えられる。

②ゴリラやチンパンジー、ニホンザルなどは群れを作って生活しているが、彼らには仲間と協力する意識がなく、「寂しい」という感情も存在しない。

③人間は野生界において比較的貧弱な生物であるが、身体能力が高い個体が生き残って子孫を残すことによって、着実に種としての進化を遂げてきた。

④ホモサピエンスは集団で協力するために、言語や顔の表情でのコミュニケーションといったツールを持つようになったが、古代宗教もまたその一つである。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

この本のテーマは、これからの本はどういう姿になるのかと、(一)これまでの本はどんな運命をたどることになるのかという、たぶん二つの問いかけを含むのだと思う。

前者の問いかけに対しては、私など何の答えも示し得ないし、できることならこれまで通りであってほしいと思うだけである。しかし先日、グソクに iPad なるものを見せられて正直直感した。なるほど、これからはこの方向に向かわざるを得まい。少なくとも読書の習慣が万人の知的要求に沿ったものである限り、一旦出来てしまった以上、この方向がタイセイを占めることになるのは抗いようのないことと思う。今はまだ揺籃期ではあろうが、瞬く間にそこに生じる諸々の問題は、たぶんより便利な、そしておそらくはよりよい方向へ進むであろうこと疑いようはない。人間もまだそのくらいの智恵は十二分に働かせ得る生き物であることは信じてもよかろう。

これに近い変革を、我々は既に四世紀も前に写本から板本へという形で曲りなりにも経験済みであり、一世紀半前には板本から活版へというさらなる経験をつんだ。ただしそれはいずれも書記することから、木版であれ活版であれ、印刷することという、手仕事の範囲での技術の転換であり、本という実体そのものは変わらなかったし、今回の電子書籍のような、物としての本がなくなるという根本的転換ではなかったことも承知してはいるが、そこで唯一心配なのは、その転換があまりに急速に行なわれることへの一抹の危惧である。商業主義ベースの急激な進展は、必ず残すべきものの判断を見誤らざるを得ないのではないか。そうであればあるほど、それはできる限りゆっくりとした動きの中でしか判断できないはずなのである。かつての転換は、少なくとも三世紀という長い時間をかけて、写本と板本とがゆっくりとした共生の時間を紡ぐことによって、ほとんど違和感も生ずることなく、したがってオリジナルとコピーとの間の価値観の変動もほとんどなく、乗りこえられた。人間の良智良能はそうした形でしか発動できないものであるらしい。

とにかく転換は必至であるとして、三世紀とまでは言わぬが、(二)できうる限りの時間をかけること、願いはその一点のみである。

物としての本の［ア］を十分心得ている我々の世代まではまだよかろう。しかし電子書籍しか知らぬ世代になった時、果してどんな知性が育まれることになるのか、空恐ろしい思いをもつのは私独りだろうか。ともかく共生の時間をできるだけ長くもってほしい。

次の問いかけ、これまでの本はどうなるのか。

それにも少なくとも二段階が考えられる。即ち著作権・版権の切れた本と、切れていない本の問題である。後者についてはしかるべく有識者の相談を重ねていただくしかないので、私などの出る幕ではない。前者の、それも明治以降のいわゆる活版本については、乱暴な言い方であることを承知の上で言えば、デバイスに取りこめるだけどんどん取りこめばよい。スキャンの技術はそれこそ［イ］であろうから、全部といってもそれほど手間も時間もかかるまい。ただし、その、物としての原姿・原型は丁重に図書館・美術館・資料館・研究所・有識者等において整理、保管し、いつでも要求に応じてその容姿・手触りを確かめ得るような配慮は必須であろう。現物としての重要度がより一層上ることは、これまた必至である。

問題はそれ以前の木版本、及び写本類である。これが過去千二百年の間に積み上げられた日本人の経験と思弁の総体であることは言うまでもないが、その総数の確認の目安はある。岩波書店編纂の『国書総目録』は明治以前の日本人著作物の総所在目録を五十音順に並記したものであり、一応五十万点と数えられている。当然それに洩れたものも多いので、大方、百万点を越すと考えて誤るまい。国家的事業として、それを取りこむことは、予算と時間さえあれば、それほど問題はなかろうが、(三)本当の問題は、誰がそれを読むのかという所にある。

知っての通り、この書物群は、楷書体の漢文著作以外はすべて、変体仮名と草書体漢字、即ち〝くずし字〟によって記されている。出版物が現在のような仮名字体に定められたのは、明治三十三年に、一音節を一文字に限定した小学校令が施行されて以来のことで、よほど特殊なものでない限り、活字体の漢字と右の仮名文字で記され、くずし字は手書きの場合のみとなった。それでも昭和戦前までの教育を受けた人には、自然とその能力（これを私は「和本リテラシー」と呼ぶ）は残っていたが、決定的にそれを失ったのは戦後のことなので、まだせいぜい六十五年ほどにしかならないのに、今や大学院を出た人でも、国文・国語

・国史といった学科の、それも近世以前を専攻する人のみが［ウ］具えるのみで、それ以外はほとんどカイメツ状態といえる。むろん字体を限定したことによるメリットの大きさは十分わかるが、(四)そのデメリットに関してはほとんどイッコだに与えられなかったのではないか。

ところで電子書籍に明治以前の書物を取りこむ場合、写本であれ木版本であれ、まずは原本をそのままスキャンしてというのが常識であろうが、前述した事情にてらせば、それではほとんど誰も読めないことになる。これまた確認はできないが、和本リテラシーをもつ人の総数は、前述の専攻に因んだ研究者とその卵を数えあげたとしても、おそらく三千人を少し越えるほどの数であろう。日本人の〇・〇〇三％にしかならない。そこで、既に活字化された書物だけでもということになれば、その総数は歴史・芸術・思想・社会・文芸、ともかくあらゆる領域を総ざらいしてみても、おそらく一万点には及ぶまい。総数を百万点として、わずか一％にしかならないのである。

日本の知識人で古典は必要ないと言いきれる人はおそらくあるまい。そして、そうした人達はおそらく、必要な古典はほとんど活字化されているにちがいないと思いこんでいるのではないか。しかしそれ以外の活字化されないものは読めないとなれば、実際の所、日本の知識人の大半は、先人の知的遺産のわずか一％しか利用していないことになる。これほどもったいないことがほかにあろうか。

ただし、明治以降の先人が責任をもって選んでくれた古典を活字で読めるのなら、それで十分ではないかという考え方もあるのかもしれぬ。しかしこれまで活字化された古典はといえば、根本的には近代主義の名のもとに意味づけられ、必要とされた書籍であることは当然であろう。その近代に明確な疑問符がつき始めた今日、必要なパラダイム・シフトが、近代主義で選ばれた古典を読むだけで、本当に大丈夫なのか。鍵はむしろ残りの九九％にひそんでいると思うのが常識なのではないだろうか。その九九％を読めるのが、何と国民の〇・〇〇三％しかいないという、何とも凄まじい文化状況が出現してしまっているのである。

九九％全部を活字化した上で電子書籍化するのは、たぶん夢物語であろう。それよりは、今は読めずとも、とにかく全部を原本のままに取りこむ方がまだ早い。ここはどうしても公的機関の出番であろう。例えば国文学研究資料館など、館を挙げて変な

選択基準などを考えず、片っ端から取りこめばよい。その上で並行して、文化行政を一から考え直し、小学生に英語を教える傍らで、せめて一時間でもくずし字の勉強をさせるようにしたら如何なものか。むろんそれらの学童が本当に古典を読む必要性に目覚めるのは、なお十年ほども後の事にはなるだろうが、小学生の時に覚えた文字は、志さえもてば思い出すのもそれほど困難なことではなかろう。早い話がアメリカの小学生で十八世紀の「独立宣言」をそのままで読めない子供はいないだろうが、日本の知識人でたかだか百四十年前の福沢の『学問のすゝめ』を刊行された姿のままで読める人が何人いるだろうか。(五)古典を活字で読むということは、つきつめれば〝翻訳〟で読むことにしかならぬはずである。外国語の習得は、空間的な他者の存在と意見を知るための営為として、その必要性は十二分に認めるが、くずし字の勉強はその十分の一の努力で十分であり、さらには時間軸を遡って、他ならぬ先祖という他者の意見に直に触れる、唯一最良のルートを見つけることなのである。

これまで、私は事あるごとに〝物としての本〟を理解することを最重要事として論じてきた。ただしそれは結局の所、前述した三千人を対象としていたにすぎない。せめてその範囲の人には先人の生活と意見のすべてを曲りなりにも〝翻訳〟ではなく、直に感得するための［　エ　］の方法になり得ると信じていたからである。

今後、和本リテラシーの回復に成功すれば三千人は一挙に一億三千万になり、電子書籍はそれらの人々に先人の叡智のすべてを公開することになる。〝物としての本〟の理解は、その上のこととしても別にかまうことはない。もちろんその時まで〝物〟を電子情報としてだけではなく、具体的に立派に保存・整理する義務は当然のことであり、また、電子化してこそ、その義務はより明確に意識されるようになるだろう。読めないがゆえに、毎日、反故となって廃棄され続ける運命にある和本（この辺りはもう少し詳しい事情の説明が必要であろうが、本稿ではその余裕がない）は、その時ようやくその運命からまぬがれることができる。電子書籍はそのための［　オ　］のように感じられるこの頃である。

（中野三敏「和本リテラシーの回復のために」による）

問一　傍線部A・B・C・Dと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　グソク

①チケットがソクジツ完売する　②オクソクでものを言う　③トクソク状が届く　④無病ソクサイ　⑤犯人をコウソクする

16

B　タイセイ

①選手センセイをする　②毒蛇のケッセイを作る　③セイジャクな夜　④五輪のセイカランナー　⑤イセイが良い

17

C　カイメツ

①昔をナツかしむ　②家屋をコワす　③春風がココロヨい　④過去をクやむ　⑤法律をアラタめる

18

D　イッコ

①コキャクを確保する　②武器のカクノウコ　③コベツに指導する　④知識をコジする　⑤資源がコカツする

19

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ ・ オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア
①堅苦しさ　②不確実性　③有意義性
④必然性　⑤不誠実性

イ
①日進月歩　②順延可能　③一朝一夕
④奇々怪々　⑤本末転倒

ウ
①嫌々ながら　②何となく　③辛うじて
④意気揚々と　⑤確率的に

エ
①万難　②超絶　③次点
④略式　⑤無二

オ
①邪魔　②福音　③終点
④限定　⑤台本

20　21　22　23　24

問三　傍線部（一）「これまでの本はどんな運命をたどることになるのか」という問いに対して筆者はどのように考えているか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

25

①少なくとも三世紀ほどの長い時間をかけて、写本と板本とがゆっくりとした共生の時間を紡ぐことによって違和感を払拭し、オリジナルとコピーとの間の価値観の変動もほとんどないようにすれば、何の問題も生じることはないはずだ。

②日本の知識人で古典は必要ないと言いきれる人はおそらくいないだろうが、必要な古典はほとんど活字化されているにちがいないし、実際の所、活字化されていないものなど読む必要はなくなるにちがいない。

③物としての原姿・原型は丁重に図書館・美術館・資料館・研究所・有識者等において整理、保管し、現物としての重要度をより一層高める配慮をして、近世以前を専攻する人のために活用するべきである。

④全部を活字化した上で電子書籍化するのは、たぶん夢物語であろうから、今は読めずとも、とにかく全部を原本のままに取りこみ、学童が古典を読む必要性に目覚めることを期待して、和本リテラシーの回復に努めるべきである。

⑤明治以降の活版本のうちで著作権の切れた本に関しては、デバイスにどんどん取りこめばよく、また明治以前の木版本や写本類に関しても、とにかく原本を片っ端から取りこみ、近代主義で選ばれた古典を読むことに慣れる必要がある。

問四　傍線部（二）「できうる限りの時間をかけること、願いはその一点のみである」とあるが、筆者がそう考える理由は何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

26

①小学生の時に覚えた文字は、志さえもてば思い出すのもそれほど困難なことではなく、十年ほど後には学童たちが古典を読むべき時代がやってくるはずだから。

②電子書籍は今はまだ揺籃期（ようらん）ではあろうが、そこに生じる諸々の問題は、瞬く間により便利でよりよい方向へ進むであろうことは疑いようはないから。

③国家的事業として書物を取りこむことは、予算と時間さえあればそれほど問題はないが、版権の切れていない本は有識者の相談を重ねるべきであるから。

④転換の形態は書記することから印刷することという、手仕事の範囲での技術の転換であり、本という実体そのものは過去のものと変わらないから。

⑤変革の実体はゆっくりとした動きの中でしか判断できないはずであり、商業主義ベースの急激な進展は残すべきものの判断を見誤らせる可能性があるから。

問五　傍線部（三）「本当の問題は、誰がそれを読むのかという所にある」とする筆者の不安の理由は何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

27

①明治以降の先人が責任をもって選んでくれた古典を活字で読めるのなら、それで十分であり、全部の写本を保存する必要はないと考える人がいるから。

②近代主義で選ばれた古典だけではなく、残りの九九％に近代への疑問符に答える鍵がひそんでいるかもしれないが、それを読める日本人があまりに少数だから。

③空間的な他者の存在と意見を知るための営為として、外国語習得の必要性は十二分に認めるが、日本人の外国語習得能力が低すぎるため洋書を読めないから。

④字体を限定したことによるメリットとデメリットをよく検討した上で、廃棄してもよい和本を選ばなくてはならないが、現状ではそれが不可能だから。

⑤オリジナルとコピーとの間の価値観の変動はほとんどないが、人間の良智良能をうまく発動できる少数者だけが貴重な書物を読める現状があるから。

問六　傍線部（四）「そのデメリット」とは何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

28

①かつての転換は、少なくとも三世紀という長い時間をかけたため、写本と板本とがゆっくりとした共生の時間を紡ぐ必要が生じてしまった、ということ。

②読めないがゆえに廃棄され続ける運命にある和本だが、字体を限定したことによって、ようやくその運命からまぬがれるかもしれない、ということ。

③戦後の教育を受けた日本人の多くはくずし字を読む能力を喪失したため、先人の残した膨大な数の知的財産のほとんどを利用できなくなった、ということ。

④外国語の習得は、空間的な他者の存在と意見を知るための営為として、その必要性は十二分に認めるが、くずし字の勉強をする時間がなくなった、ということ。

⑤とにかく全部を原本のままに取りこむ努力をしなければ、九九％全部を活字化した上で電子書籍化するのは、たぶん夢物語に終わってしまう、ということ。

問七　傍線部（五）「古典を活字で読むということは、つきつめれば〝翻訳〟で読むことにしかならぬ」とあるが、筆者はこの問題について具体的にはどうするべきだと考えているか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

29

①物としての本を電子情報としてだけではなく、具体的に立派に保存・整理することができれば、翻訳で古典を読むよりもより理解しやすくなるはずである。

②和本リテラシーを持った三千人の日本人が、先人の生活と意見のすべてを翻訳し、世間一般の人々に先人の叡智のすべてを公開すべきである。

③明治以降の先人が責任をもって選んでくれた古典を活字で読めるのなら、それで十分ではないかという考え方について、

もっと真面目に考えるべきである。

④くずし字で書かれた木版本や写本類を読むことこそが、他ならぬ先祖という他者の意見に直に触れる、唯一最良のルートを見つけることにつながるはずである。

⑤古典を翻訳することによって、一定の範囲の人には先人の生活と意見のすべてを曲りなりにも保存・整理することが可能になるはずである。

問八　本文の内容にあてはまるのはどれか。最も適当なものを、次の①～⑦の中から二つ選べ。

30・31

①とにかく木版本や写本類全部を原本のままに取りこむ方が早いのだから、全部を活字化した上で電子書籍化することは、現状ではやってはいけないことである。

②現物としての重要度を一層高めるためには、その原姿・原型を図書館等において保管するだけではなく、研究者がその容姿・手触りを確かめなくてはならない。

③電子書籍に明治以前の書物を取りこむ場合、写本であれ木版本であれ、原本をそのままスキャンしてしまうと、ほとんど誰も読めなくなってしまうので、無駄である。

④現在の日本では先人の知的遺産のわずか一％しか活字化されていないのだが、それ以外の活字化されていないものの多くは読む価値がないと思われる。

⑤今回の電子書籍のような、物としての本がなくなるという根本的転換を被る可能性のある我々世代は、残すべきものを見誤ることのないよう判断するべきである。

⑥子供たちが本当に古典を読む必要性に気づく時のことを考えて、文化行政を一から考え直し、せめて一時間でもくずし字の勉強をさせることが望ましい。

⑦書物を電子情報として残す方法のみが、それらを立派に保存・整理することにつながり、また電子化してこそ、その義務はより明確に意識されることになる。